

優秀賞

水とともに歴史を歩む

水戸市立笠原中学校

二年 大森 花音

私の家の近所には、逆川緑地という公園があり、その緑地を流れる川が逆川だ。逆川は水戸の中心市街地にあり、水戸市を代表する自然の一つである千波湖へと南北に流れる川である。そのような逆川の流れる逆川緑地には、当時の笠原水道の水路の樋を復元した模型をはじめとして、笠原水道の水に実際に触れることのできる「竜頭共用栓」など、笠原水道の歴史を視覚的に理解できる仕掛けが数多くある。私は幼い頃から家族とともにこの逆川緑地を散歩などでよく訪れ、親しんできた。多種多様な動植物の生存するこの地で、豊かな自然や様々な生き物と触れ合うことのできる環境を支えているのは、水資源によるものだろう。逆川を身近な自然に感じてい

た私だが、思えば、笠原水道が造られた想いについて、あまり知らなかった。そこで私は、笠原水道の歴史について調べてみた。

水戸の歴史と聞いて、誰もが真っ先に思い浮かべると言っても過言ではないほど水戸市とゆかりの深い徳川家だが、笠原水道も例に漏れず、徳川家の歴史と深いつながりをもっている。笠原水道は、水戸黄門のモデルとなった徳川光圀公によって江戸時代に整備されたそう。日本では十八番目に古い上水道で茨城県の県指定文化財にもなっている。現在水戸市には下市という地域があるが、当時の下市だった下町という地区は、低湿地であったものの水質が悪く、飲用水の確保に苦労していた。そのような、水の便の良くない下町の給水難を救おうと造られたのが、笠原水道である。この工事には、五百五十四両の費用がかけられ、二万五千人余りの人々が携わったそう。一年の工事を経て造られた、全長約十kmの笠原水道は、上水に恵まれなかった下町の人々の生活用水として大いに活用され生活に欠かせないものとなったそう。

このように、水という資源は元来からとても貴重なものとして大切にされてきた。そのことは現在も変わることなく、水は守るべき自然の恵みなのだ。

しかし、今日の日本の現状はどうだろうか。

私たちは、日常生活のあらゆる場面で水を使って生きている。一日の生活を思い返すと、飲み水や料理に飲料水として使われるのはもちろん、洗濯やトイレ、手や顔を洗ったり歯を磨いたりするときなど、水無しには生活できないように思う。

日本では、先人たちの努力による技術の進歩のおかげで、蛇口をひねればすぐにきれいで安全な水が得られ、水を手に入れるためには何不自由なく生活することができている。そのため、水の大切さを見失いがちだ。

そんな日本では最近、数々の水問題が起こっており、特に身近なものは水の使い過ぎによる、環境への負担である。日本人の一人あたりの水の使用量は、一日あたり約二百三十五ℓで、これは世界平均の約二倍にもなるそうだ。水が届けられるには、浄水場や下水処理場など、様々な場でエネルギーが使われ

ているが、その過程で二酸化炭素が排出されるため、温室効果ガスとして地球温暖化を促進させることにつながってしまう。水を使いすぎることは、地球上の生物の健康や命を脅かす原因となっているのだ。

このような問題を改善するためには、一人一人が水の重要性を理解し、高い意識をもって行動することが、解決へと導く糸口になるのではないだろうか。私は今、学校での掃除当番で水道を担当している。毎日の掃除の中で、使っていないときにはこまめに蛇口を閉めるなど、身近な生活の中での意識改革をすることが肝要だろう。そして、古くから重んじて受け継がれて来た「水」という貴重な資源を、これからも大切に守っていきたい。